

新潟県佐渡、長野県および奈良県の洞穴棲コウモリの条虫相

沢田 勇 (奈教大・生物)

Cestode fauna of the cave bats in Niigata (Sado), Nagano and Nara Prefectures

ISAMU SAWADA

1978年8月6日新潟県佐渡郡相川町の竜眼の池洞窟にて *R. ferrumequinum* を捕獲して寄生条虫を調べたところ、*Vampirolepis ogaensis* に交って *Hymenolepis rashomonensis* が宿っていた。ついで10月28日長野県南安曇郡安曇村にある旧発電用導水路にて *R. ferrumequinum* を採集して条虫の寄生を調べた結果、*V. hidaensis* と *Insectivorelepis yoshidai* が寄生していた。さらに11月5日奈良県吉野郡天川村洞川のコウモリ窟の *R. ferrumequinum* を調べたところ *H. rashomonensis* が寄生していた。これらの条虫相を他の地方のコウモリの条虫相と比較すると次のようになる。*V. ogaensis* は東北地方日本海側に位置する山形県、秋田県および青森県などに生息する *R. ferrumequinum* に寄生する条虫と同種である。*H. rashomonensis* は北海道から九州にかけて広く分布する *R. ferrumequinum* に寄生する条虫と同種である。一方、長野県産の *R. ferrumequinum* に寄生していた *V. hidaensis* は岐阜県下の *R. ferrumequinum* を初め西日本の各地に分布する *Miniopterus schreibersii* に寄生する条虫と同種である。一方、*I. yoshidai* は岐阜県産の *R. ferrumequinum* に寄生する条虫と同種である。以上の条虫相に立脚して host-parasite relationship の面から *R. ferrumequinum* の分布を考えてみると、佐渡の *R. ferrumequinum* は東北地方の日本海側に生息するそれと関連性がある一方、日本各地に広く分布する *R. ferrumequinum* にも関連性のあるコウモリが混生していた。長野県のそれは主として岐阜県下のコウモリに関連性があると同時に西日本に分布するコウモリにも関連性があるコウモリが前者同様混生していた。また、奈良県のそれは日本各地に分布する *R. ferrumequinum* に関連性のあるコウモリが生息している。

南西諸島におけるイボイモリの分布について

宇都宮妙子, 宇都宮泰明 (広大・生物生産), 又吉盛健 (鹿大・熱研)

On the distribution of *Tylototriton andersoni* in Ryukyu Archipelago

TAEKO UTSUNOMIYA, YASUAKI UTSUNOMIYA, SEIKEN MATAYOSHI

イボイモリ (*Sylototriton andersoni*) Boulenger, 1892は南西諸島の固有種で、古成層からなる高い山のある奄美大島、徳之島、沖縄島、渡嘉敷島にのみ生息している。奄美大島での採集記録は極めて少なく、地元の知識人、ハブ捕り人等にも本種を知っている人は稀である。徳之島では美名田山、丹発山、剝岳、犬田布岳の南および西にゆるやかに広がる標高100~200mの丘陵地帯は目撃頻度が高く、多くの繁殖地がみられた。沖縄島では与那覇岳自然保護区、本部半島中心部、石川市南部において目撃頻度が高かった。特に石川市南部はゆるやかな丘陵地帯で個体数も多く、繁殖地もそれぞれの場所で確認され、数千個の卵がみられたところもある。徳之島における前記地域と石川市南部の生息地は集落の周辺や市街地の近くで比較的ひらけた場所である。またこの両地域は半沢 (1935) の地質図によると、古生層の山ずそで、その表層が国頭礫層と琉球石灰岩層が入りまじってゆるやかに続く丘陵地帯である。何故にこのような場所に多く生息しているかは不明である。奄美大島ではこのような地形の場所はなく、山がけわしい事が本種の生息数の少ないことに結びつくか否かは今後の調査にまたねばならない。渡嘉敷島での採集記録は1例である。

これまでにも報告したように徳之島の個体と沖縄の個体では、背中線隆起、皮膚等に差がみられ、体長も沖縄産の方がはるかに大きいものがある。